

# ケアマネの出会った 家族たち

## 9

### ～ 家族理解と家族支援 ～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

～ 「波風立てずに・・・」～

相談援助の場面では、利用者さんや家族の話はありのままに受容しなくてはなりません。けれども、利用者さんや家族の話を聞きながら、「どうも変だな。」と腑に落ちない時も正直なところあります。テレビのホームドラマを観ているような、なんとなく整いすぎている家族。本音が隠された展開になっている話の進み具合。そういう場面に出くわすと、少々対応の仕方に工夫がいるなど感じます。

特に、ケアマネジャーのところに相談に来られるのは、介護が必要となったご本人というより、介護をしているご家族や、独居高齢者を心配して相談機関に訪れる地域住民などの場合も珍しくありません。そうすると、実際にご本人にお会いする時に、どんな理由（目的）で面談するか、本人へどのように説明したら良いか考えます。相談に来た方々は、なるべく、穏便にことが進むといいな、余計な勘繰りをされずに、思うようなサービ

スにつながって、介護者や周囲の人が安心する方向に持っていかたいいな、という本心もストレートにケアマネジャーに要求することもしばしばです。この「穏便に」というのがくせものです。

家族が介護を担う場合、あるいは、独居高齢者の周囲で見守る近隣住民。介護の度合い（要介護度）よりも、それまでの家族間や近隣住民との関係性が、介護負担や心配ごとに大きく影響しているなど感じます。これまで、それぞれの歴史の中で様々なやり取りがなされての「今」がある。と考えると、改めて意見の食い違いで人間関係の中に波風を立てたくないと思う気持ちもわからなくはないのですが、そんな事なかれ主義的な物事の進め方が、人間関係をさらに脆弱にしていくのではないかとも思うのです。

時には、本音で気持ちをさらけ出してみる。多少のぶつかり合いはあったとしても、それぞれの考えや思いをお互いの耳で、心で聴いておく、というのは後々悪いことではないように感じます。

むしろ、気持ちを明らかにしておくことで、「誰にもわかってもらえない。」などと意個地にならなくて済むかもしれません。

### ～向き合う～

90歳のトキさんの長男である、正夫さんから、介護のことで相談があるとの連絡を受け、ケアマネジャーが初めてトキさんの自宅へ訪問しました。トキさんは、長男夫婦と同居していますが、3年前にご主人を亡くし、今は自宅から外出することもなく、家で静かに過ごしているとのこと。正夫さんと妻里美さんが心配するには、トキさんが家にこもりきりなので、だんだんと物忘れも出始めており、このままどんどん体が悪くならないか、という事でした。近所の人の勧めもあって、ディサービスにトキさんを通わせることがいいのではないかと、というサービス利用の希望です。一方、トキさんは、正夫さん夫婦と同居しながらも自室があり、好きなように一日を過ごしています。テレビを見たり、本を読んだり。時々庭に出て草花の手入れもするとのこと。90歳という年齢になり、今までのように機敏な動きはできないけれど、家事は里美さんに任せ、身の回りのことはなんとか自分でできている。改めて体調不良もなく、健康状態には満足しています。「もう90だから、それこそ、いつ病気になってもいいし、死んでもいいのですよ。」と話されます。そして、正夫さん夫婦が勧める、ディサービスについては、「今更どこかに出かけて行って、ワイワイ・ガヤガヤしなくても十分です。家にいて好きなように過ごしたいです。」とはっきりと意思表示されました。

### ディサービス

ディサービスに通って欲しい長男夫婦と、どこへも行きたくない本人の意向は真っ向から対立します。初回の訪問でもあり、サービスだけを無理に勧めていくわけにはいきません。日ごろの生活状況のアセスメントをしてから、次回は1週間後に訪問させていただくこととしました。長男夫婦

には、家族内で、サービス利用について話してみてください、と声をかけます。そうは言っても、もしかすると、本人と長男夫婦の話し合いはされないのではないか、なんとなくそんな予感がありました。

初回訪問の2日後のことでした。朝早くに、里美さんから電話がありました。電話口では「もう、介護が大変で私の体がダメになってしまいます。なんとか、ディサービスに通わせてもらえませんか。」と涙ながらの訴えです。先日、ケアマネジャーが訪問した後に、家族内でディサービスの利用について何か話し合いはしましたか、と尋ねると「お義母さんは、私の言う事はきかないので、話をしても無駄なんです。」と返答がありました。ディサービスを利用するにしても、ご本人の気持ちも向かなければ、無理やり連れていくわけにもいかないで、一度ご本人と、長男夫婦と、ケアマネジャーで話し合いをしましょうと伝え、予定されていた日から幾日か早めて訪問することにしました。

### 話し合い

ケアマネジャーの2回目の訪問です。まず、長男夫婦が日中を過ごす居間で、長男夫婦、トキさん、ケアマネジャーで話合いました。「正夫さんご夫婦は、トキさんにディサービスの利用を勧められていますが、トキさんは、ディサービスには通いたくないようです。それぞれのお気持ちをここで、お話ししていただけませんか？」と問いかけました。すると、間髪を入れずに、里美さんが言葉を発します。それは、最近家の中に閉じこもりがちになったトキさんの健康への心配ではありませんでした。里美さんが、この農家の家に嫁いできた時から現在に至るまで、農家の仕事や大舅、大姑などのお世話、そして子育てなど休む間もなく仕事をしてきたこと。トキさん夫婦は60歳を過ぎるとすぐに隠居生活を始め、好きなことをして過ごしてきた。今、自分たちが60歳を過ぎて体の疲れもある中で、トキさんのお世話があるから、

好きなこともできずに、毎日が過ぎていくことに、精神的にも肉体的にも本当につらい状況だと訴えます。夫である、正夫さんの表情は至って冷静です。これまでも、里美さんから何度も相談されていたのでしょう。特に妻の強い訴えに驚く事もなく、口を出すこともなく黙って聞いていました。すると、やや不満げな表情のトキさんが、強い口調で言いました。「あんた(里美さん)は、私のことが邪魔なのだね。私がどこかに行けばいいと思っているのだね。私が邪魔であれば、どこへでも好きなところへやってくれ。吐き捨てるように言い放しました。里美さんは、トキさんの言葉を受けて「お義母さんは、私がすることはなんでも当たり前だと思っている。私はもう若くないから、疲れるし今までのようにはできない。少く休みの時間が欲しいです。お義母さんを邪魔にしているわけではありません。介護のサービスを使って少しでも協力してもらいたかったです。」と言いました。里美さんの目から涙がこぼれます。一通り、お二人(トキさんと里美さん)のやり取りが終わったので、ケアマネジャーは「では、どうしましょうか。」と二人の顔をみながら問いかけました。里美さんは、言いたいことは全部言った、という表情でトキさんを見つめています。トキさんはケアマネジャーに遠慮するように口を開きました。「すみませんね。家族の恥をさらしてしまって。私は、本当はどこへも行きたくないけれど、里美さんが行けというなら、仕方ないので、サービスというところに行ってみます。なんだかんだ言っても、今は里美さんのお世話になっているし、私がわがまま言うわけにもいけませんから。我慢します。」唇をかみしめ、湧きあがる涙をこらえながらの言葉でした。

#### 別室で

「では、サービスのことも含めて、トキさんとお話したいので、今度は、トキさんと二人でお話させて欲しいと思いますので、トキさんのお部屋にお邪魔させてください。」そう言って、ケアマ

ネジャーとトキさんは、二人でトキさんの部屋に移りました。

トキさんは自分の部屋に入り、いつもの椅子に腰かけると、ハンカチで目頭を押さえました。こらえきれない涙がこぼれ落ちます。しばらく沈黙の時間が流れます。

「トキさん、本当はサービスなどには行きたくない。でも、トキさんが折れなければ、ここでの生活は続かない、そんな風に思っている言葉だったのですか。」ケアマネジャーが問いかけると「里美さんには世話になっているからね。確かに、私は早くから隠居生活をさせてもらってラクをさせてもらっている。今は、返す言葉もないよ。でもね、息子は優しくしてくれるし、私はできることなら、この家にずっと居たいと思っています。だから、里美さんとは仲良くやっていかないとダメなこともわかっています。よく知らないところですけれど、サービスに行ってみます。」涙ながらにそう話しました。ケアマネジャーは「トキさんが、本当はサービスには行きたくないということ。自宅ですべて暮らしたいと思っていること。里美さんとも仲良くやっていくために、自分の気持ちに折り合いをつけたこと。私は、そのことをはっきりと覚えておきます。無念な気持ちも、悔しい気持ちも、私には届いています。」そう声をかけると、トキさんは「よろしく願います。」と言って涙をぬぐいました。

#### 利用

それから、サービスを利用するトキさんが少しでも楽しく過ごせるように、これまでの楽しみなどをお聞きしました。数か所あるサービスで、トキさんの知っている方がいるところを選びました。サービスの職員が事前面接に来た時には、トキさんのお部屋で、これまでの家族とのやり取りも説明し、必ずしも、喜んでサービスに通う気持ちにはないことも伝えました。サービス利用のきっかけは、決して納得いく流れではありませんでした。でも、家族が仲良くして暮らし

続けられる為の方法をトキさんは自ら選びました。ケアマネジャーとケアチームスタッフは、そんなトキさんの気持ちを支えることにしました。

ディサービスに通い始めたトキさんに、職員も配慮を重ね、趣味や仲間たちのおしゃべり、家での様子などを声かけしながら楽しんでサービスを利用してもらう時間を作りました。トキさんにとって、初めは抵抗があったディサービスも、人との触れ合いや、活動が楽しみに変わっていくことにそう時間はかかりませんでした。やがて、自分からディサービスに通う回数を増やしたい、という話になり、週に数回のディサービスははりきって参加できるようになりました。毎月のケアマネジャーの訪問では、長男夫婦とトキさんが別々に面談をしていましたが、いつの頃からか、同じ部屋で会話を交わすことができるようになりました。長男正夫さんが、「行きたくないと思っていたけど、今は楽しく通えるし元気になった。無理矢理でも行かせて良かった」と恩着せがましく話すとトキさんは、「若いもの言う事を聞かないと、家を追い出されるからね。」と冗談交じりに言葉を返します。何事もないように、穏便にすませたかった、トキさんと長男夫婦の物事の決め方が変わったのはこの出来事の後からでした。何か新しい対応が必要となった時には、トキさんと長男夫婦が別々に考えをケアマネジャーに訴えるのではなく、それぞれが思いを明らかにして、互いの主張に折り合いをつけることができるようになっていきました。その都度、満足度60パーセントと言ったところでしょうか。不満の40パーセントは、ケアマネジャーやサービススタッフがしっかりと認識しておきました。

#### 穏便に

初めの頃、長男夫婦は、出来るだけ、トキさんとのやり取りなしに、事を穏便に運びたい気持ちもありました。けれども、そう上手くはいきません。ストレスの多い場面ではありましたが、心を開いて思いを明らかにしておく。物事は全てが納

得の上で進んでいるわけではないということ、双方が理解しておくことが必要だったのでしょうか。険悪なやり取りの場面では、ケアマネジャーとしては、同席することも辛くなり、しばしば、その状況を早めに切り上げてしまいたくなることもあります。けれども、ケアマネジャーが居心地の悪さに付き合うのは、ほんのわずかな時間です。大抵の家族は、そんな居心地の悪さを何度も繰り返していかなくてはならないのです。吐き出したい、伝えたい言葉さえ、呑み込んで心の中にストレスとして残していく。ケアマネジャーは、誰かの味方ではなく、誰もの味方でありたい。そう考えると、居心地の悪い場面であったとしても、しっかりその場に付き合っ、向き合っ、それぞれの思いをありのままに受け止めることが役割だと思います。長男夫婦がケアマネジャーに求めていたのは、ディサービスにつなげる事ではなかったと思います。自分たちの長年抱えてきた母親との関係における葛藤への理解です。トキさんもまた、自宅で過ごしたいという願いを継続できるための支援をケアマネジャーに期待していたのだと思います。最も、トキさんは自分の中でどうすれば長男夫婦とうまくやっていくことができるのか、長年の知恵で落とし所を知っていたようですが・・・

#### 60%満足

人生は、なかなか思うようにはいかないものです。理不尽なことも背負いながら、生きていくしかない時もあります。そんな時、悲しみや悔しい気持ちと一緒に歩んでいることを、「誰にもわかってもらえない」ではなく、「あの人は私の気持ちを分かってくれている。」そう思えたら、その後の歩みは少しだけ、ほんの少しだけ軽くなるかもしれません。ケアマネジャーが「あの人」になれると、本人も家族も満足度60パーセント不満度40パーセントでも、なんとかやっていけるのかもしれない。

\*プライバシー保護の観点から、事例は事実情報を加工しています。